

里の今昔

永井荷風

青空文庫

昭和二年の冬、西とりの市いちへ行つた時、山谷堀さんやぼりは既に埋められ、日本堤にほんづつみは丁度取崩しの工事中であつた。堤から下りて大音寺前だいおんじまえの方へ行く曲輪外くるわそとの道もまた取広げられていたが、一面に石塊いしころが敷いてあつて歩くことができなかつた。吉原を通りぬけて驚神おわとりじん社の境内けいだいに出ると、鳥居前の新道路は既に完成して、平日は三輪行みのわゆきの電車や乗合自動車の往復する事をも、わたくしはその日初めて聞き知つたのである。

吉原の遊里は今年昭和甲戌こうしゆつの秋、公娼廢止こうしやうはいしの令の出づるを待たず、既に数年前、早く滅亡していたようなものである。その旧習とその情趣とを失えば、この古き名所はあつてもないのと同じである。

江戸のむかし、吉原の曲輪くるわがその全盛の面影を留めたのは山東京伝さんとうきやうでんの著作と浮世絵とであつた。明治時代の吉原とその附近の町との情景は、一葉女史いちようの『たけくらべ』、ひろつりゆうろうの『今戸心中いまどしんじゆう』、泉鏡花いずみきよたかの『註文帳』の如き小説に、滅び行く最後の面影を残した。

わたくしが弱冠じやつかんの頃、初めて吉原の遊里を見に行つたのは明治三十年の春であつた。『たけくらべ』が『文芸倶楽部』第二巻第四号に、『今戸心中』が同じく第二巻の第八号

に掲載せられたその翌年である。

当時遊里の周囲は、浅草公園に向う南側千束町三丁目を除いて、その他の三方にはむかしのままの水田や竹藪や古池などが残っていたので、わたくしは二番目狂言の舞台で見馴れた書割、または「はや悲し吉原いで、麦ばたけ。」とか、「吉原へ矢先そろへて案山子かな。」などという江戸座の発句を、そのままの実景として眺めることができたのである。

浄瑠璃と草双紙とに最初の文学的熱情を誘い出されたわれわれには、曲輪外のさびしい町と田圃の景色とが、いかに豊富なる魅力を示したであろう。

その頃、見返柳の立っていた大門外の堤に佇立んで、東の方を見渡すと、地方今戸町の低い人家の屋根を越して、田圃のあなたに小塚ッ原の女郎屋の裏手が見え、堤の直ぐ下には屠牛場や元結の製造場などがあって、山谷堀へつづく一条の溝渠が横わっていた。毒だみの花や、赤のままの花の咲いていた岸には、猫柳のような灌木が繁っていて、髪洗橋など腐った木の橋が幾筋もかかっていた。

見返柳を後にして堤の上を半町ばかり行くと、左手へ降る細い道があった。これが竜泉寺町の通で、『たけくらべ』第一回の書初めに見る叙景の文は即ちこの処であった。

道の片側は鉄漿溝おはぐろどぶに沿うて、廊者くるわものの住んでいる汚い長屋の立ちつづいた間から、江戸町一丁目と揚屋町あげやまちとの非常門を望み、また女郎屋の裏木戸ごとに引上げられた幾筋のはねばし芻橋が見えた。道は少し北へ曲つて、長屋の間を行くこと半町ばかりにして火の見梯子みばしごの立っている四辻に出る。このあたりを大音寺前と称とえたのは、四辻の西にし南みなみの角に大音寺という浄土宗の寺があつたからである。辻を北に取れば竜泉寺の門前を過ぎて千束稲荷の方へ抜け、また真直まぢに西の方へ行けば、三島神社みしまじんじやの石垣について阪本通さかもとどおりへ出るので、毎夜吉原通いの人力車じんりきしやがこの道を引きもきらず、提灯ちようちんを振りながら走り過るのを、『たけくらべ』の作者は「十分間に七十五輛」と数えたのであつた。

長屋は追々まばらになつて、道もややひろく、その両側を流れる溝どぶの水に石橋をわたし、生茂る竹むらをそのままの垣にした閑雅な門構の家がつづき出す。わたくしはかつてそれらの中の一ひと構かまえが、有名な料理屋田川屋の跡だとかいうはなしを聞いたことがあつた。『たけくらべ』に描かれている竜華寺りゆうげじという寺。またおしやまな娘美登里みどりの住んでいた大黒屋の寮なども大方このあたりのすたれた寺や、風雅な潜門くぐりもんの家を、そのまま資料にしたものであろうと、通るごとにわたくしは門の内をのぞかずにはいられなかつた。江戸時代に楓もみぢの名所といわれた正燈寺しょうとうじもまた大音寺前にあつたが、庭内の楓樹は久しき以

前、既に枯れつくして、わたくしが散歩した頃には、門内の一樹がわずかに昔の名残を留めているに過ぎなかった。

大音寺は昭和の今日でも、お酉とりさま様の鳥居と筋向いになって、もとの処かりがしんに仮普請の堂を留とどめているが、しかし周囲の光景があまりに甚しく変ってしまったので、これを尋ねて見ても、同じ場処ではないような気がするほどである。明治三十年頃、わたくしが『たけくらべ』や『今戸心中』をよんで歩き廻った時分のことを思い返すと、大音寺の門は現在電車通りに石の柱の立っている処ではなくして、別の処にあつてその向きもまたちがつていたようである。現在の門は東向きであるが、昔は北に向い、道端からはずっと奥深い処にあつたように思われるが、しかしこの記憶も今は甚だおぼろである。その頃お酉様の鳥居前へ出るには、大音寺前の辻を南に曲つて行つたような気がする。辻を曲ると、道の片側には小家のつづいた屋根のうしろに吉原の病院が見え、片側は見渡すかぎり水田のつづいた彼方かなたに太郎稻荷の森が見えた。吉原田圃はこの処をいつたのである。裏田圃とも、また浅草田圃ともいつた。単に反歩たんぽともいつたようである。

吉原田圃の全景を眺めるには廓内かくないきようまち京町一、二丁目の西側、お齒黒溝はぐろどぶに接した娼しょう楼ろうろうの裏窓が最もその処ところを得ていた。この眺望は幸にして『今戸心中』の篇中に委くわしく描

き出されている。即ち次の如くである。

忍ヶ岡しのぶおかと太郎稻荷の森の梢には朝陽あさひが際立あつて映あつている。入谷いりやはなお半分もや霏もやに包ま
れ、吉原田甫よしわたんぼは一面の霜である。空には一ひとむれ群むれ一群のおとりじんじや小鳥が輪を作そはつて南の方へ飛
んで行き、上野の森には鳥からすざわが噪さわぎ始めた。大鷲おとりじんじや神社の傍そばの田甫の白鷺が、一羽起
ち二羽起ち三羽立つと、明日の西の市の売場に新らしく掛けた小屋から二、三個にんの人
が見あらわれた。鉄漿溝おはぐろどぶは泡立あつたまま凍こつて、大音寺前の温泉の烟は風に狂いながら
流れている。一声の汽笛が高く長く尻を引いて動き出した上野の一番汽車は、見る見
る中うちに岡の裾すそを繞めぐつて、根岸ねぎしに入いつたかと思うと、天王寺の森にその煙も見えなくな
つた。

この文を読んで、現在はセメントの新道路が松竹座の前から三ノ輪みわに達し、また東西に
は二筋の大道路が隅田川の岸から上野谷中の方面に走っているさまを目撃すると、かつて
三十年前に白鷺の飛んでいたところだとは思われない。わたくしがこの文についてここに
註釈を試みたくなったのも、滄桑そうそうの感に堪えない余りである。

「忍ヶ岡しのぶおか」は上野谷中の高台である。「太郎稻荷」はむかし柳やながわ河藩主立花氏の下屋敷しもやしき
にあつて、文化のころから流行はやりはじめた。屋敷の取払われた後、社殿とその周囲の森と

が浅草月光町に残っていたが、わたくしが初めて尋ねて見た頃には、その社殿さえわずかに形ばかりの小祠になっていた。「大音寺前の温泉」とは普通の風呂屋ではなく、料理屋を兼ねた旅館ではないかと思われる。その名前や何かはこれを詳にしない。当時入谷には「松源」、根岸に「塩原」、根津に「紫明館」、向島に「植半」、秋葉に「有馬温泉」などという温泉宿があつて、芸妓をつれて泊りに行くものも尠くなかつた。

『今戸心中』はその発表せられたころ、世の噂によると、京町二丁目の中米楼にあつた情死を材料にしたものだという。しかし中米楼は重に茶屋受の客を迎えていたのに、『今戸心中』の叙事には引手茶屋のことが見えていない。その頃裏田圃が見えて、そして芻橋のあつた娼家で、中米楼についてやや格式のあつたものは、わたくしの記憶する所では京二の松大黒と、京一の稲弁との二軒だけで、その他は皆小格子であつた。

『今戸心中』が明治文壇の傑作として永く記憶せられているのは、篇中の人物の性格と情緒とが余す所なく精細に叙述せられているのみならず、また妓楼全体の生活が渾然として一幅の風俗画をなしているからである。篇中の事件は西の市の前後から説き起されて、年末の煤払いに終っている。吉原の風俗と共に情死の事を説くには最も適切な時節を拵んだところに作者の用意と苦心とが窺われる。わたくしはここに最終の一節を摘録しよう。

小万こまんは涙ながら写真と遺書いきおきとを持ったまま、同じ二階の吉里よしざとの室へやへ走って行ッて見ると、素もとより吉里のおろうはずがなく、お熊くまを始め書記かきやくの男おとこと他ほかに二人ばかり騒いでいた。小万は上かみの間まに行ッて窓から覗いたが、太郎稲荷いなぎ、入谷いりや、金杉かなすぎあたりの人家ともしびの燈あかり火ひが散見ちらつき、遠く上野の電気燈ひるごころが鬼火ひとだまのように見えているばかりである。次の日の午時ひるごころ頃、浅草警察署の手で、今戸の橋場寄りの或露地ろじの中に、吉里が着て行ッたお熊の半はんてん天てんが脱捨ぬぎすててあり、同じ露地の隅田川の岸には娼妓じやうごの用いる上草うわぞう履りと男物の麻裏草履あしむきとが脱捨ぬぎすてててあつた事が知れた。(略)お熊は泣な々なくなく箕輪みのわの無むえ縁寺んでらに葬むむり、小万はお梅を遣やッては、七日七日の香華かうげを手向たむけさせた。

箕輪の無縁寺は日本堤の尽きようとする処から、右手に降りて、畠道を行く事一、二町の処にあつた浄閑寺じようかんじをいうのである。明治三十一、二年の頃、わたくしが掃墓に赴いた時には、堂宇は朽廃し墓地も荒れ果てていた。この寺はむかしから遊女の病死したものの、または情死して引取手のないものを葬る処で、安政二年の震災に死した遊女の供養塔くようとうが目めに立つばかり。その他ほかの石は皆小さく蔦つたかつらに蔽おほわれていた。その頃年少のわたくしがこの寺の所在を知つたのは宮戸座の役者たちが新比翼塚ひよくづかなるものに香華を手向けた話をきいた事からであつた。新比翼塚は明治十二、三年のころ品川楼で情死をした遊女盛系せいせい

と内務省の小吏谷豊榮二人の追善に建てられたのである。(因にいう。竜泉寺町の大音寺もまた遊女の骨を埋めた処で、むかし蜀山人が碑の全文を里言葉でつくった遊女にがしの墓のある事を故老から聞き伝えて、わたくしは兩三度これを尋ねたが遂に尋ね得なかつた事がある。)

日本堤を行き尽して浄閑寺に至るあたりの風景は、三、四十年後の今日、これを追想すると、恍として前世を悟る思いがある。堤の上は大門近くとはちがって、小屋掛けの飲食店もなく、車夫もいず、人通りもなく、榎か何かの大木が立っていて、その幹の間から、堤の下に竹垣を囲し池を穿った閑雅な住宅の庭が見下された。左右ともに水田のつづいた彼方には鉄道線路の高い土手が眼界を遮っていた。そして遙か東の方に小塚ツ原の大きな石地藏の後向きになつた背が望まれたのである。わたくしはもし当時の遊記や日誌を失わずに持っていたならば、読者の倦むをも顧ずこれを採録せずにはいかなかつたであろう。わたくしは遊廓をめぐる附近の町の光景を説いて、今余すところは南側の浅草の方面ばかりとなつた。吉原から浅草に至る通路の重なるものは二筋あつた。その一筋は大門を出て堤を右手に行くこと二、三町、むかしは土手の平松とかいつた料理屋の跡を、そのまの牛肉屋常磐の門前から斜に堤を下り、やがて真直に浅草公園の十二階下に出る千

東町二、三丁目の通りである。他の一筋は堤の尽きるところ、道哲の寺のあるあたりから田町へ下りて馬道へつづく大通である。電車のないその時分、廓へ通う人の最も繁く往復したのは、千束町二、三丁目の道であった。

この道は、堤を下ると左側には曲輪の側面、また非常門の見えたりする横町が幾筋もあって、車夫や廓者などの住んでいた長屋のつづいていた光景は、『たけくらべ』に描かれた大音寺前の通りと変りがない。やがて小流れに石の橋がかかっている、片側に交番、片側に平野という料理屋があった。それから公園に近くなるにつれて商店や飲食店が次第に増えて、賑な町になるのであった。

震災の時まで、市川猿之助君が多年住んでいた家はこの通の西側にあった。西の市の晩には夜通し家を開け放ちにして通りがかりの来客に酒肴を出すのを吉例としていたそうである。明治三十年頃には庭の裏手は一面の田圃であったという話を聞いたことがあった。さればそれより以前には、浅草から吉原へ行く道は馬道の他は、皆田間の畦道であった事が、地図を見るに及ばずして推察せられる。

『たけくらべ』や『今戸心中』のつくられた頃、東京の町にはまだ市区改正の工事も起らず、従って電車もなく、また電話もなかったらしい。『今戸心中』をよんでも娼妓が電話

を使用するところが見えない。東京の町々はその場処場処によって、各固有の面目を失わずにいた。例えば永代橋辺と両国辺とは、土地の商業をはじめ万事が同じではなかったように、吉原の遊里もまたどうやらこうやら伝来の風習と格式とを保持して行く事ができたのである。

泉鏡花の小説『註文帳』が雑誌『新小説』に出たのは明治三十四年で、一葉柳浪二家の作におかれること五、六年である。二六新報の計画した娼妓自由廃業の運動はこの時既に世人の話柄わへいとなっていたが、遊里の風俗はなお依然として変る所のなかつた事は、『註文帳』の中に現れ来る人物や事件によつても窺い知ることが出来る。

『註文帳』は廓外の寮に住んでいる娼家の娘が剃かみそり刀の崇たたりでその恋人を刺す話を述べたもので、お齒黒溝はぐろどぶに沿うた陰鬱な路地裏の光景と、ここに棲息して娼妓の日用品を作つたり取扱つたりして暮しを立てている人たちの生活が描かれている。研屋とぎやの店先とその親爺との描写はこの作者にして初めてな為し得べき名文である。わたくしは『今戸心中』がその時節を年の暮に取り、『たけくらべ』が残暑の秋を時節にして、各おのおのその創作に特別の風趣を添えているのと同じく、『註文帳』の作者が篇中その事件を述ぶるに当って雪の夜を拵いぢりんだことを最も巧妙なる手段だと思つてゐる。一立齋いちりゆうさい広重ひろしげの板画について、雪に埋

れた日本堤や大門外の風景をよろこぶ鑑賞家は、鏡花子の筆致のこれに匹^{ひつじよ}如たることを認めるであろう。

鉄道馬車が廃せられて電車で替えられたのは、たしか明治三十六年である。世態人情の変化は漸く急激となったが、しかし吉原の別天地はなお旧習を保持するだけの余裕があったものと見え、毎夜の張見世^{はりみせ}はなお廃止せられず、時節が来れば桜や仁和賀^{にわか}の催しもまたつづけられていた。

わたくしはこの年から五、六年、凶^{はか}らずも旅^{きりよ}の人となったが、明治四十一年の秋、重ねて来り見るに及んで、転^{うた}た前度^{ぜんど}の劉^{りゅうろう}郎^{ろう}たる思いをなさねばならなかつた。仲^{なか}の町^{ちやう}にはビーヤホールが出来て、「秋信^{あきま}先通^{ます}ず両行の燈影」というような町の眺めの調和が破られ、張店^{はりみせ}がなくなつて五丁町^{ごちやうまち}は薄暗く、土手に人力車の数の少くなつた事が際立つて目についた。明治四十三年八月の水害と、翌^{あくるとし}年四月の大火とは遊里とその周囲の町の光景とを変じて、次第に今日の如き特徴なき陋巷^{ろうこう}に化せしむる階梯^{かいてい}をつくつた。世の文学雑誌を見るも遊里を描いた小説にして、当年の傑作に匹^{ひつちゆう}疇^{しゆう}すべきものは全くその跡を断つに至つた。

遊里の光景と風俗とは、明治四十二、三年以後にあつては最早やその時代の作家をして

創作の感興を催さしむるには適しなくなつたのである。何が故に然りというや。わたくしは一葉柳浪鏡花等の作中に現れ来る人物の境遇と情緒とは、江戸浄瑠璃中のものに彷彿としてゐる事を言わねばならない。そしてまた、それらの人物は作家の趣味から作り出されたものでなく、皆實在のものをモデルにしていた事も一言して置かねばならない。ここにおいてわたくしは三、四十年以前の東京にあつては、作者の情緒と現實の生活との間に今日では想像のできない美妙なる調和があつた。この調和が即ちかくの如き諸篇を成さしめた所以である事を感じるのである。

明治三十年代の吉原には江戸浄瑠璃に見るが如き叙事詩的の一面がなお實在していた。『今戸心中』、『たけくらべ』、『註文帳』の如き諸作はこの叙事詩的の一面を捉え來つて描写の功を成したのである。『たけくらべ』第十回の一節はわたくしの所感を証明するに足りるのである。

春は桜の賑ひよりかけて、なき玉菊が燈籠の頃、つづいて秋の新仁和賀には十分間に車の飛ぶことこの通りのみにて七十五輛と数へしも、二の替りさへいつしか過ぎて、赤蜻蛉田圃に乱るれば、横堀に鶉なく頃も近きぬ。朝夕の秋風身にしみわたりて、上清が店の蚊遣香懷炉灰に座をゆづり、石橋の田村やが粉挽く白の音さびし

く、角海老かどえびが時計の響きもそぞろ哀れの音を伝へるやうになれば、四季絶間なき日暮にっ里ほりの火の光りもあれが人を焼く烟けぶりかとうら悲しく、茶屋が裏ゆく土手下の細道に落ちかかるやうな三味の音を仰いで聞けば、仲之町なかのちよう芸者が冴さえたる腕に、君が情の仮寐の床にと何ならぬ一ふしあはれも深く、この時節より通そひ初はむるは浮かれ浮かるる遊ゆ客うかくならで、身にしみじみと実じつのあるお方のよし、遊女つとめあがりのさる人が申しき。

一葉が文の情調は柳浪の作中について見るも更に異なる所がない。二家の作は全くその形式を異にしているのであるが、その情調の叙事詩的なることは同一である。『今戸心中』
第一回の数行を見よ。

太そら空は一片の雲も宿とどめないが黒味わたつて、廿四日の月は未だ上のぼらず、霊あるが如き星のきらめきは、仰げば身も冽しまるほどである。不夜城を誇ほこり顔がおの電気燈は、軒のきより下の物の影を往来へ投なげておれど、霜しも枯がれ三月の淋しみしさは免まぬれず、大門から水道尻まで、茶屋の二階に甲かん走ばしつた声のさざめきも聞えぬ。

明後日が初酉の十一月八日、今年はやや温あたか暖たかく小袖を三枚重みつつかさねるほどにもないが、夜が深ふけてはさすがに初冬の寒さむさが感じられる。

少い時ま前ま報うつたのは、角海老かどえびの大時計の十二時である。京町には素見客ひやかしの影も跡を絶

ち、すみちよう 町には夜を警めよいましの鉄棒かなぼうの音も聞える。里の市が流して行く笛の音が長く尻を引いて、張店にもやや雑談はなしの途断とぎれる時分となつた。廊下には上草履うわぞうりの音がさびれ、台の物の遺骸を今室へやの外へ出している所もある。遙かの三階からは甲走ツた声で、喜助どん喜助どんと床番とこばんを呼んでいる。

遊里の光景とその生活とには、浄瑠璃を聴くに異らぬ一種の哀調が漲みなぎっていた。この哀調は、小説家はその趣味から作り出した技巧の結果ではなかつた。独り遊里のみには限らない。この哀調は過去の東京にあつては繁華な下町にも、静な山の手の町にも、折に触れ時につれて、切々として人の官覚を動す力があつた。しかし歲月の過すくるに従い、繁激なる近世的都市の騒音と燈光とは全くこの哀調を滅してしまつたのである。生活の音調が変化したのである。わたくしは三十年前の東京には江戸時代の生活の音調と同じきものが残っていた。そして、その最後の余韻が吉原の遊里において殊に著しく聴取せられた事をここに語ればよいのである。

遊里の存亡と公娼の興廢の如きはこれを論ずるに及ばない。ギリシャ古典の芸術を尊むがために、誰か今日、時代の復古を夢見るものがあるう。

青空文庫情報

底本：「荷風随筆集（上）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年9月16日第1刷発行

2006（平成18）年11月6日第27刷発行

底本の親本：「荷風随筆 一〜五」岩波書店

1981（昭和56）年11月〜1982（昭和57）年3月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年5月28日作成

2011年4月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

里の今昔

永井荷風

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>